

事業活動報告 NO.3

平成25年度 FDのための情報技術研究講習会
開催報告

1. はじめに

本研究講習会は、ICT環境、教室設備、授業形態などの課題により、アクティブ・ラーニングの実施に踏み切れない教員の方々に参加いただき、それぞれの環境下で実践可能な糸口を見つけていただくことを目的として、1) タブレットを意識した電子書籍型教材作成コース、2) LMS活用コース、3) 授業マネジメントコースの三つのコースを設定して実施された。

平成26年2月26日～28日にかけて、大阪経済大学において研究講習会が開催され、67名（49大学、1短期大学）の参加があった。

1日目午前は共通講義として、中央教育審議会会長・独立行政法人日本学術振興会理事長の安西祐一郎氏に、「主体性を育む授業とは（PBL授業の重要性）」と題した基調講演をしていただいた。その後、2大学から「eポートフォリオの導入と活用」（大阪府立大学）、「レスポンスアナライザーを用いたチーム基盤型学習（TBL）」の授業事例が紹介された。基調講演や授業事例への受講者の評価は高く、学生の主体性を引き出し、延ばすという視点で教育手法や仕組みを考察することができ、今後も時機にかなった講演や事例を紹介していくことが重要であろう。

1日目午後は、三つのコースに分かれ講習会が行われた。講習会終了後回収したアンケートによれば、参加者の講習会に対する印象は良いものが多かった。また、本講習会の特徴は、参加者にリーダーが多いことである。これは、講習会の内



容もさることながら、講習内容にグループ演習が多く取り入れられているため、講習会終了後も参加者間での交流があり、各大学間の情報交換に役立っているためと考えられる。ある教員が、自分で行っている講義、講演、研究発表の内容について第三者から忌憚のない意見を聞く機会是非常に少ないはずである。この講習会では、いずれのコースにおいても、講習の成果物について、お互いに評価する時間を設けている（ピア・レビュー）。これにより、自分の成果物を客観的に評価できるという点が本講習研究会のもう一つの特徴である。

2. 講習会

本年度は、アクティブ・ラーニングを見据え、事前・事後学修の促進などのために、タブレット端末での利用を想定した電子書籍型教材の作成技術を獲得することを目指した「タブレットを意識した電子書籍教材作成コース」、学生参加型のアクティブ・ラーニングに求められる手法とLMSの活用技術の習得を目指した「LMS活用コース」、アクティブ・ラーニングによる学修の進め方を参加者間で体験し、PBLやTBLの授業運営、教材提示方法などを自らの授業運営に活かすことを目指した「授業マネジメントコース」で講習会が行われた。「電子教材作成コース」および「LMS活用コース」は、アクティブ・ラーニングを行うための基礎部分と位置付け、「授業マネジメントコース」はその基礎の上に立ち、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく授業をいかに組み立てるかというプロセスを参加者が相互評価しながら作りあげるものとした。

(1) タブレットを意識した電子書籍型教材作成コース

本コースは、学生の事前・事後の自己学修を促進するために、タブレット端末での利用を想定した電子書籍型教材の作製技術を獲得することを目

指した。具体的なコースの流れは、教材の一部をプレゼンテーションソフトで作成し、それに音声を加えて動画として取り込み、ファイル形式を変換し、動画を含む電子書籍を作成する3部構成とした。この後、実際に持参した各自の教材を使って電子書籍型教材を作成し、途中で班別のピアレビュー、最後に全体発表会を実施した。

プレゼンテーションソフトの利用技術では、プレゼンテーションのソフトとしてPreziを紹介した。Preziはプレゼンテーションの内容を1枚のシートに配置し、そのコンテンツをズーム機能により柔軟かつ動的に提示できる特徴を持っているが、従来よく使われているPowerPointとは違った提示法に興味を持った受講生が多く好評であった。

プレゼンテーションの表示では、作成したプレゼンテーションをPC画面に表示させ、音声を付加しながら動画として取り込む方法の他に、取り込んだ画像をMPG4のファイルに変換する際、USBから起動できるフリーソフトを紹介した。

動画を含む電子書籍の作成では、テキストを流し込むだけで作成でき、文字の装飾、表、静止画・音声・動画の挿入などの機能を持つ電子書籍のオーサリングツールである「Myいーぱぶ35」を紹介した。このオーサリングはEPUB3の電子書籍リーダーがなくても、PCのブラウザで閲覧できるHTML5ファイルも出力できる。短い実習時間しかなかったが、操作方法の修得だけでなく、実際に持参された教材を電子書籍化することができた。

ピアレビューと全体発表会は、受講者による自主的な進行で実施した。ピアレビューではあえて異分野の受講生をグループ化したため、異なった授業の様子や教材に触れることができ、互いに参考になることが多かった。また、実際に利用できる力作も多々見受けられた。

講習会後のアンケートによると、「期待に沿うものであった」「課題の解決以上のものがあった」「目的が達成できる内容でよかった」など好評であり、受講者の参加の動機と一致した内容であったと考えられる。また、「実践したことのない新しい分野だったのでためになった」という意見に代表されるように、受講者に大きな刺激を与えることができたと感じている。

このコースは3名の講師で綿密に打ち合わせをして分担したが、質問に適切に対応するためにはお互いの担当部分をさらに熟知する必要性を感じた。また、整った施設を借用させていただいた講

習会であったが、トラブルについてコンピュータ環境によるトラブルなのか、ソフトウェアによるものなのか、操作方法の問題なのか見分けることに時間を費やした部分があったので、今後使用するコンピュータシステムについても入念に調査しておく必要を感じた。

(2) LMS活用コース

本コースは、アクティブ・ラーニングへのICT活用に関する知識および技術の習得を目標とし、学修支援システム（LMS：Learning Management System）およびタブレットPCの利用方法に関して講義・実習を行った。なお、本コースは、既に電子資料（PDFやプレゼンテーション資料）等は自身で作成できる技術を持つ方を対象とし、LMSやタブレットPCの活用方法を主軸として展開した。

LMSの活用に関しては、オープンソースLMSの一つであるMoodleを題材にし、多くのLMSに共通するような機能を取り上げ、基本的利用方法および授業での活用方法について、解説・実習を行った。アクティブ・ラーニングでは、授業内での活動と同様、予習・復習といった授業外での学修が重要であることを鑑み、講習では、予習、授業、復習の一連の流れの中でLMSをどのように活用するかを、実際にコース構築を行いながら学修する形式を取った。また、講習そのものが、アクティブ・ラーニングとなるよう、コースを講習者間の意見交換、実習の時間を多く取り、講師からの説明時間を少なくするように設計した。これに合わせて、テキスト等も簡素な内容としたが、周辺資料の整備が十分ではなく、提供された情報が少ないとの不満を持たれた方がいたことが、アンケート調査から分かった。このような意見を真摯に受け止め、今後の資料提供、コース設計に生かしたい。

タブレットPCの利用に関しては、参加者全員に1台ずつiPadを配布し、共有電子ホワイトボード、クリッカー等、学生同士の意見交換をICTで



サポートする手法、学生の意見を実時間で取得する方法などの実習を行った。また、タブレットPC、無線LAN、プロジェクターを連動させたワイヤレス環境でのプレゼンテーションの実現方法に関して講義、実習を行った。

講義のまとめとして、参加者毎に、自身の授業へのLMSの導入を想定したコースの作成を行っていただき、参加者全員によるピアレビューを行った。

アンケート調査からは、コースの難易度は参加者に対して適正であり、満足されるものであったようである。ただし、より実践的な内容を希望する意見も散見され、今後のコース内容を検討する際に考慮したい。

今後、ますますアクティブ・ラーニングの重要性は高くなるが、その理解が現状ではまだ不十分である。また、ICTはアクティブ・ラーニングをサポートする道具として非常に有効な手段であると考えられるが、あまり活用されていないのが現実のようであり、今後も積極的なサポートが必要であろう。

(3) 授業マネジメントコース

本コースは、学生が能動的に学修を深める教授法を実現するために、アクティブ・ラーニングの手法の基本知識と技術を深めることを目指した。授業法をPBL(Problem/Project Based Learning)でTBL(Team Based Learning)との組み合わせによって、学修の進展が理解できることを目標としている。現在の大学教育において学生の学修時間を自律的に確保することは、十分な準備が必要になってくる。このような状況下にあって、教育の本質である知の蓄積と再構築・活用を教育の成果として求める声は、切実に高まってきているが、教育界が充分に対応できていないのが現状である。これらの要求に応えるためにも、従来成果にも増して自学自習を促進し、知の活用を自律的に前進できるように教育の一手法として教授法に取り込み、教員各自の創造的教育法の展開を促進してい

く必要がある。そこで、米国で展開されているアクティブ・ラーニングの手法を紹介することで、受講者各自の教育方法の発展を促進することを目指した。

教育方法には画一的方法は存在しない。多くの学生の学修の到達度、目標、意欲によってすべて教育の内容と方法は異なってくる。学生の受け身の教育は、大学教育としては許せない雰囲気を持つ必要があると同時に、より深い内容の質に応じる必要がある。

講習後のアンケートによると、ICTを取り入れたアクティブ・ラーニングによる学修の進め方については、「見通しがたった」92%、「達成できなかった」8%との結果であった。参加された教員から「新しいプランの参考になった」、「授業の質や教育力の向上につなげたい」、「実際にシラバスを検討することでアクティブ・ラーニングの手法を授業の中に位置づけることができた」、「設計した授業を実現したい」、「学内で共有化を図りたい」などの感想が得られた。なお、1名の方からは「具体的な事例をより多く聞きたかった」との意見があり、期待に添えなかったことから、来年度に向け参加される教員全員に達成感が得られるようコースの運営について改善を図ることになっている。

3. 今後の講習会

本講習会を「研究講習会」としたのは、ICTを使うことで、学生の学修に対する動機づけ等、学生が自ら進んで事前・事後学習を行う授業を本講習会に参加していただいた教員の皆様と本講習会の講師の方々が共に研究しながら、各先生方の環境に合ったものに展開していただくためである。今後も、ICTを活用した授業をどのように展開すれば学修効果が上がるのかをこの講習会で発信していきたい。

文責：FD情報技術講習会運営委員会
委員長 田宮 徹

